

研究資料・校歌について

Research notes on School songs.

次世代教育学部学級経営学科

小川 隆章

OGAWA,Taka-aki

Department of Classroom Management

Faculty of Education for Future Generations

キーワード：校歌、愛校心、郷土愛、学校環境

Abstract：Almost all schools in Japan have official school songs.

The purpose of this paper is to submit two types of data concerning school songs and school children. (a) school official songs from 34 elementary schools in Izu peninsula, Shizuoka Prefecture were gathered. The words of these songs were analyzed and compared to the analytical data from songs of elementary schools in Fukuoka city.

(b) Some college students' essays on their school songs which they have sung in their childhood and adolescence were analyzed.

Considerations of these data suggested that the school songs were helpful to teach pride and attachment to their schools and hometowns for students.

Keywords：school songs, attachment to school, attachment to hometown, school environment

は じ め に

校歌に興味を持ったきっかけは、環境心理学の授業を担当し、関連する文献を読んだことだ。環境心理学の本を見ると、執筆している人は心理学者よりもむしろ、都市計画・建築の研究者が多かった。居住する地域の認知に関して文献を探すと、「校歌に歌われた〇〇地域の景観」という研究報告が多いのに気がついた。

今年の2月、僻地教育に関する研究集会に参加し、終了後の教育関係者との懇親会の際に、同席の初対面の別の県教育委員会の課長さんと会話をもった。私が最近、校歌に関心を持っていると述べると、彼はこんな内容を語った。先週のこと、自分の出身の中学校で創立何十周年かの記念式典の折に、教育長の祝辞を代読するため参列しに行った。式典で在校生と一緒に校歌を歌ったところ、感動で胸がジーンとして目頭が熱くなった。校歌っていいものですね、と。

また、小林一彦氏は次のような新聞記事を紹介している。長崎県のある小学校を卒業して、19歳で結婚し故郷を離れた70代の老婦人が、今はうろ覚えになっている故郷の小学校の校歌を正確に聞きたいという切

なる願いを娘さんがその小学校に伝えたという。郷里の学校では今は別の校歌に変わったため歌われなくなり、楽譜も残っていなくなったが、その思いにこたえて、地元のお年寄りらが集まって、互いに覚えている部分をつなぎ合わせて歌い、テープに入れて送ってあげたという話である。

これらは、子どものころ歌った校歌をうたい、聞くとき、当時の故郷の姿、山や川、海などの自然、親兄弟や友人仲間・恩師などが懐かしく思い出され感激を新たにすることを示している。我が国のたいていの小・中学校・高校に校歌があり、学校行事に際して斉唱されることが多い。ここでは、筆者が校歌に関して関心をもち扱ったささやかな資料を提示して、今後の校歌と児童生徒に持つ影響について考察する出発点とすることにした。

1. 伊豆地方の小学校の校歌の歌詞の内容分析

牛島達郎氏は「校歌に関する調査研究1－福岡市立小学校を中心に」と題する論文において、福岡市内の公立小学校143校の校歌の歌詞の内容分析を紹介している（大庭茂美氏も一連の研究において各学校の校歌を調査している）。これにならって、筆者の郷里の伊

豆半島の小学校のうち、伊東市、熱海市、伊豆市、伊豆の国市、函南町、南伊豆町のうち2校、合計34校の歌詞について内容分析を試みた。伊豆地方というと、このほかに三島市・下田市等の学校について歌詞を収集して、全体的に見て行かなくてはならないのだが、とりあえず、収集済みの校歌についての結果を中間報告として提示してみよう。

①校歌に見られる徳目的内容表現

1) 学ぶ	17校
2) 明るい	12校
3) 伸びる	12校
4) 清い	9校
5) 強い	8校
6) 楽しい	8校
7) 鍛える	7校
8) 進む	7校
9) 輝く	5校
10) 逞しい	5校
11) 仲良い	5校
12) 元気	5校
13) 優しい	4校
14) 正しい	4校
15) 美しい	4校
16) 磨く	4校
17) 気高い	4校
18) 恵み	4校
19) 大きい	4校
20) 羽ばたく	4校
21) 愛	4校
22) 助け合う	4校
23) 誓う	4校
24) 智慧	3校
25) 雄々しい	3校
26) 登る	3校
27) 広い	3校
28) 努力	3校
29) 理想, 健やか, 立つ, 仰ぐ, 負けない, 呼ぶ,	2校

このほか、さわやか、徳、担う、拓く、意思、築く、素直、生きる、育つ、顧みる、志、尽くす、守る、規律、躍進 1校

☆福岡で見られず、今回の集計に出てきたものの学ぶ、進む、鍛える、磨く、けだかい、恵み。「まなぶ」はどこでも自然だ。学校は何といっても、学ぶところだから。

「学ぼう、みんなで、元気よく」

(伊豆市八岳小学校)

「互いにはげみ、学び合う」(函南町西小学校)

②校歌に見られる身体の部位の表現

1) 手	7校
2) 胸	5校
3) 体	4校
4) 命	4校
5) 腕(かひな, を含む)	3校
6) 額	2校

このほか、眉、肌、髪、肩、瞳、が各1校
額、肌、髪は福岡では無かったが、主要なところは一致している。

☆肌、髪 は各1校だが福岡に無いもの、
「額に汗、かいなに力、」伊東西
「みんな仲良く手を組んで」丹那
「手を組み合って、友と友～」函南西
「輝く窓に手を取りて」宇佐美
「大きな夢を胸に抱き」網代
「その肌に温泉香り」湯が島
「嶺の風、髪くしけずり」湯が島

③校歌に見られる色彩表現

1) 緑	17校
2) 青	4校
3) 白	2校
4) 赤	1校
5) 桃	1校

これについては福岡市の小学校と類似している。

「赤白桃と咲くツツジ」南伊豆・竹麻
「緑の丘に」泉

「朝日は昇る丘の上、緑のかおる学舎に」網代

④校歌に見られる地域固有の自然景観

1) 天城山	10校
2) 富士山	8校
3) 狩野川	9校
4) 箱根山	3校
5) 駿河湾	3校
6) 田方平野	2校
7) 巢雲山	2校
8) 大島(三原山, および七島)	2校
9) 太平洋	2校

このほか、大室山、玄岳、丈山、丹那トンネル、狩野の山、達磨山、江間の山、深沢の谷川、大見川、多聞の屋敷、立野の森、八幡の森。

海、とか、山、というのではなく、固有名詞をあげているもの、はこうになっていた。
「三原山は朝の陽に映え、天城連峰に夕日は沈む」八幡野

「天城の山、ちかくそびえて」八岳

「流れも清き狩野川の」熊坂

「天城ねはわれらの父、狩野川はわれらの母、この山の強きけだかさ、この河の清き、やさしさ、心とせまし、いざ我ら、湯が島の子」湯が島

「学びの窓の朝夕に、仰ぐ天城の雲の色、～、世界の海に流れゆく、狩野の川瀬のたくましき」狩野

「朝日かがよう不二が嶺、高き望みを描がきつつ」土肥南

「富士の山より、いや高く、狩野の川よりいと深く父と母とのみ恵みを、命の限り忘るなよ」大仁

⑤地形や自然現象

- | | |
|--------|-------|
| 1) 風 | 1 4 校 |
| 2) 雲 | 1 3 校 |
| 3) 空 | 1 1 校 |
| 4) 朝日 | 9 校 |
| 5) 山 | 7 校 |
| 6) 庭 | 7 校 |
| 7) 海 | 6 校 |
| 8) 朝 | 3 校 |
| 9) さくら | 3 校 |
| 10) 水 | 3 校 |
| 11) 流れ | 3 校 |

このほか、鳥、若葉、松、虹、水、岩根、川、自然、陽、潮、峰、2 校

月、海原、泉、波、浜、竹、滝、雪、真珠、1 校

「岩戸の山の朝空に輝く雲は希望です」泉

「明日に仰ぐだるまの山は理想の雲の湧くところ」修善寺

「緑の風を吸い込んで」丹那

「岩の松の風に耐え」富戸

「湯のけむり、あたたかく、風になびけば」熱海第一

「箱根の山に雲が湧く」丹那

☆雲風空など福岡と同じ、庭・虹・鳥は福岡にない。

「庭の桜も歳ふりて」宇佐美

「若草は今、さわやかな庭に燃え立つ」大東

「カモメと見しは白帆にて」三浜

「朝日照る滝、えがく虹、羽ばたく明日を描く虹」修善寺東

「巢隠れの鳥はわがとも、雲越える翼雄々しく」大仁東

⑥多く使われている文言

1) 心 1 5 校

2) 光 1 3 校

希望 1 3 校

友 1 3 校

5) ふるさと 7 校

明日 7 校

7) 歴史 7 校

8) 歌う 6 校

道 6 校

夢、父母、力、5 校

萌える、社会、先生（師）、学舎、

声、未来 4 校

教え、平和、世界、2 校

民族、喜び、伝統、永遠、文化、地球

1 校

☆父母、先生（師）、学舎、声、明日、うたう、

萌える、が福岡に無いもの、

「国に親につくさん心」熊坂、2 番では「国に親につかえんその身」

「されば、我らも親親のごとく」伊東西

「栄える街の明日担い」網代

「子恋の、子恋の森に歌うよ」伊豆山

「夢の未来の萌えたつ道に」伊東南

「いくつしみある師のもとに」宇佐美

「天城ねはわれらの父～」湯が島

「父母のあつき恵みと師の教え、深く育む、

ああわが学舎・桜が丘」月ヶ瀬

「銀杏の大木立つ庭に、父母の代を歌う風」

修善寺南

⑦地域特有の表現、時代を感じさせる表現

1) 学校名 2 1 校

2) ○○の子という表現 7 校

3) 湯けむり（温泉） 5 校

4) 橘（みかん） 3 校

このほか、椿、ヒメシヤラ、ポプラ、カモメ、

ツツジ、アユ、反射炉、おおきみ、いね、黒

潮、熱帯のシダ、各 1 校

以上の分析結果を見ると、牛島氏の福岡市の小学校

と極めてよく似た結果と、一部異なる結果が見られた。伊豆地方の小学校として、今回は三島市および下田市の小学校の校歌を収集していなかったの、今後、これらの不足している資料を集めるとともに考察を深めていきたい。

2. 校歌を歌った経験を持つ大学生に自己の小・中・高校での校歌について、レポートを書いてもらった。

北海道の国立大学教員養成課程で「環境心理学」を受講する学生10名、出身地は北海道、東北、中部、九州、沖縄にわたっていた。何人かのレポートを見てみよう。

(沖縄出身の男子)

小学校のころの校歌は、メロディーは思い出せるが歌詞までははっきり覚えていたのは1番だけである。六年間も歌っていたが、母校の校歌を思い出せるのは少ないというのは少し情けない気持ちだ。気になったフレーズは1番の歌詞の出だしの「古城」という言葉である。はっきりとは私にはわからないが、昔、この越來(こえく)という場所に城があったみたいである。この「古城」という言葉は、中学校の校歌の歌詞にも出てくる。中学校は小学校の隣にあって場所的にもさほどかわりはない。だから、この「古城」という言葉を使ったと予想される。小学校の校歌の3番の歌詞を見ると、私の越來の地域に昔有名だった「飛び安里」という、羽をつけて飛ぼうと試みた人が出てくる。今考えればこの歌詞はその人のことを言っているのかもしれない。

中学校のころの歌詞に出てくる「でいご」は県花でもあり、私の学校にもあったので結構覚えている。しかし、中学校のころの歌詞も1番はしっかり覚えているが、2番3番とあまり覚えていない。

高校のころの歌詞は、小学校・中学校のときに比べ、授業のときに覚えているか思い出そうとしたけど全く覚えていなかった。卒業してからあまり期間がたっていないがこんなに何も覚えていないのは情けないと感じた。

(鹿児島県出身男子)

☆私のお気に入り感想

私は、すべての校歌の中で高校の校歌が一番気に入っています。伊集院とは旧町名で郡山(旧町名)とは距離にして15キロほどです。由緒あるものばかりでとても魅力的な場所です。その由来を元に校歌が作られているため非常に歌に気持ちが入ります。全校生徒で歌う校歌ほどいいものはありません。校歌の意味を

丁寧に探るとよりいっそういいなと思いました。

今回これまでの校歌を改めて見直し、調べると校歌の奥に潜む意味が自分なりに分かってきた。どんな意味があり願いがあったのか今になって納得できた。もしこのような機会が無ければ、校歌なんて思い出すことも無く、まして意味等は調べることは一生無かったと思う。なので、このような機会を与えてくださった先生に感謝したい。環境心理として校歌を使った授業実践などアイデアしだいでは子どもに、環境を考える環境観や地域や学校を考える良いきっかけになると感じた。校歌とは、人間に学校で生活していく中で、無くてはならないものだと思う。高校のある先生に「学校の校歌がしっかり歌えないやつは、肝心な所でミスる」といわれた。こじ付けかもしれないが、やはり何か自分の学校や地域・環境を誇りに持って頑張ることは、自分にとって励みになり、意欲・プライドが生まれてくる。自分はこの考えだけは貫きたい。今校歌の意味を知ったので、これからはよりいっそう自分の故郷・学校に誇りを持ち、頑張りたい。また、この「校歌」の大切さや必要性を子どもや他人に伝えられるような大人になりたいと強く思った。

(福島県出身女子)

☆小学校の校歌について

私の出身小学校は、会津坂下町立版下小学校です。この学校の校歌は二番まであるのですが、ずいぶん昔のことで記憶があいまいなので、一番しか覚えていません。以下に覚えている歌詞を記載します。

○校歌○

一、緑色濃い諏訪の森こずえ遥かに雲は行く磐梯山も輝いて声高々と呼んでいる

坂下の子達みな伸びよう行こうよ○○○理想を胸に学びの道を一筋に

ここで言う「諏訪の森」とは小学校の近くにある神社に面した森林の名前であり、また、「磐梯山」という山の名前などから、この校歌では学校周辺の環境や地域性について歌われていることが分かります。また、「坂下の子達」という部分から、この歌は児童に向けて語りかけるように歌われ、児童の進むべき方向についても歌っているように思います。

次に、校歌に関するエピソードですが、この学校では、毎週、月曜日に全校集会があり、そこで毎週のように練習させられたことを覚えています。その時、きちんと歌えない場合はやり直しをさせられるなど、校歌への指導はとても熱心にされていました。また、そのうちの数回は手話を交えながら校歌を歌っていたこ

ともありました。

☆中学校の校歌について

私の出身中学校は、会津坂下町立坂下中学校です。この学校の校歌は三番まであります。

以下に校歌の歌詞を記載しますが、漢字の変換などうろ覚えの部分もあると思われます。

○校歌○

- 一、 霊峰飯豊を遠く見て流れも清き阿賀野川近くのぞめる坂下町我が学び舎のたつところ
- 二、 豊かにしげるこの里の桐さながらにすくすくと心身共に伸びゆきて学びのみちにいそしまん
- 三、 世は移るとも変わりなく誠の道をひとすじに希望にもえて内外の平和のためにつくさん

ここから読み取れることは、「霊峰飯豊」や「阿賀野川」「坂下町」のように学校が建っている環境について書かれており、また、二番、三番では、生徒の成長をその地域にある植物に例え、生徒のあり方や生徒の歩むべき道をさしていると思われます。また、これは私が今思ったことでありますが、「誠の道」というフレーズは、昔会津藩と縁が深かった新撰組に関するところから来ているのではないかと考えます。新撰組が旗などに「誠」という字を掲げていたからです。しかし、この学校とは直接の関係がないため、確かなものとは言えません。そして、当時のエピソードについてですが、この校歌は、毎週金曜日の全校集会で毎週歌われていたことを覚えています。そこでは、上手く歌えていなかった場合、全校集会が終わった後に練習のし直しという対策がとられていました。また、学校の合唱コンクールや各種行事では特に力を入れて指導され、音楽の授業でも徹底的に練習したことを覚えています。

☆高校の校歌について

私の出身高校は、福島県立喜多方高等学校です。この学校の校歌は七番まであり、とても長いということから、普段は一番、二番、七番を歌うことになっており、入学時の校歌の全体練習時にもこの部分だけを練習します。以下に校歌のその部分を記載します。

○校歌○

- 一、 会津の原は雄大に黄金の花は穰々と昌平ここに八百年喜び多きわが郷よ
 - 二、 突こつ七千有余尺飯豊の山は聳えたりその秀霊の姿こそわれら健児の精神なれ
 - 七、 峰踏み分けていざ共に薫れる枝を手折らばや八重の潮路を漕ぎ分けて龍の宮居に到らん
- 私が上記の歌詞から当時感じていたことは、文章が

古く、とても昔に作られた歌なのかなあということでした。現在の漢字と変換が異なっていたり、現代では話さないような口調で歌われていたからです。

また、この校歌から感じられることは、やはり、周りの環境に関連するフレーズが多いということです。「会津の原」や「飯豊の山」などから見られるように、その地域から見える景色について書かれており、また、その他にも「黄金の花」や「八重の潮路」など学校から見える景色についても書かれています。そして、「われら健児の精神なれ」という点から、それらの景色、環境、自然をこの学校の生徒の特徴、または作詞者がこうあってほしいという在校生への願いが込められていると私は考えます。

次に校歌に関するエピソードですが、この学校では、入学するとすぐに、新入生は合唱部や応援団の方々から校歌の合唱指導を受けます。ここではピアノと大太鼓のメロディーに載せて歌い、最後までしっかりと歌えるまで練習は終わりません。時には合唱部の方々が生徒と生徒の間に入って指導をしてくれました。私が驚いたのは、入学が決まるとすぐに手続きの書類と一緒に校歌が録音されたCDが一枚ずつ各々に配られ、自宅で練習するように指導されるということでした。このような練習法は初めてでした。

☆全体を通して

全体を通して共通して言えることは、どの校歌でも、その土地その土地での環境や地域の特性が歌詞に反映されており、地域について歌われているということ。また、その地域の特性に関連させたり例えたりしながら在校生のあり方や進むべき道などが示されており、作詞者から在校生への思いや願いが込められたメッセージが歌詞の中に隠れているということです。

私は、歌っていた当時は歌詞の意味など考えずに、また、理解しようとせずにとだひたすらに歌っていましたが、こうして一つ一つ見ていくと校歌にもさまざまな意味があることに気がきました。このような作詞者の意図を今回考え、意図を少しでも汲み取れたことはとても良かったと思います。

また、今回歌詞を思い出すことから始め、意外にも覚えていないことに気がきました。特に小学校の歌詞ですが、やはり歌わなくなってからずいぶん年月が経ってしまったせいか、当時はあんなに一生懸命練習し、覚えたのにもかかわらず、一部の歌詞しか思い出せず、とても残念でした。やはり、時間がたったり生活する環境が変わってしまうと忘れてしまうのだと感じました。

そして、私が一番強く感じたことは、どの学校でも、校歌がとても重要なものとして扱われているということです。なぜならば、どの学校でもとても力を入れて校歌の練習に励み、各種行事では必ず歌われていたからです。これらの校歌を見ると、歌詞の内容が学校や在学生の象徴であったり、それらが暮らす地域や環境の特質を表していたりすることが理由となるのではないかと考えます。

校歌とは、それぞれの学校の象徴なのであると考えます。

(山形県出身男子)

私の出身地である山形県庄内地方の鳥海山と日本海に囲まれた・自然豊かな平野部である。それらを象徴するように、私の出身校の校歌には自然の情景が織り込まれていた。私が通っていた小学校から高校まで、全ての学校の近くには一本の大きな川が流れていた。日本三大急流の一つに数えられている最上川である。やはり最上川のことは小学校から高校まで全ての校歌に歌いこまれていたし、庄内の学校であれば大半に歌いこまれていたようだ。「川幅広い最上川流れ豊かな大らかな」と、雄大な景色を創り出す大きな川を讃え、その雄大さを心に持って立派な人間になれ、ということだったのだろう。また鳥海山に関しても、雄大さや大きさを歌ったものが多かった。私が通った小中高と、全てで統一したように1番では最上川、2番では鳥海山のことが歌われていた。それだけ郷土に根付き、愛されてきた自然の風景だったのだろう。だが、私が一番注目しているのは3番の歌詞に歌われているものである。1番、2番と県外でも有名な大きな自然の風景を歌いこんでいた。だが、3番に歌われているのは恐らく庄内の外に出たら知る人はそれほどいないと思われる。3番に歌われるのは、黒松である。黒松は別名が「雄松」と呼ばれるほど、汚染や塩害に強い。庄内の沿岸では昔から海から吹き付ける潮風や、その風に乗って飛んでくる大量の海岸の砂によって農作物に被害が出るのがざらにあり、江戸時代後期に庄内藩を治めていた本間様も頭を悩ませていた。砂の害と潮の害を同時に防ぐ為に、黒松の強さを利用することを考え、藩の百姓達と共に黒松を植えた。だが、苗木からの植林だった為に何度も何度も失敗し、成功するまでに長い時間がかかったのだそうだ。植えられた黒松は今も広大な防砂・防潮林として庄内の沿岸に連なっている。私の実家からも歩いて10分程度の所に海があるが、海に辿り着くまでは広い松林を抜けていかなければならない。このようになるまでには、非常

に長い時間がかかったのだろう。黒松のたくましさは当然のことだが、先代の住人達の努力とそれによりもたらされている我々の砂や潮に悩まされない安心した生活に感謝しよう、ということなのだろう。中学校の校歌に「さあ、進もうよ、友よ朔北の嵐に耐えた黒松のたくましさ心の盾に心の盾に」というフレーズがあり、小・高にも黒松のたくましさを讃えるフレーズがあった。赴任してくる先生方にも、この黒松のフレーズが好きだ、という方が多かった。子どもの自分は、そんなものかと思って聞いていたが、今思えば非常に素晴らしいフレーズだと感じる。このことを後輩達にもしっかりと成長していつて欲しいと考える。

(岩手県女子)

今、「校歌」を思い出してみると、その町の風景や特徴、町並みや人との関わり、または学校生活のなかでの様々なことが思い出されます。地域に対する愛着心があると、「校歌」もよく覚えているのかもしれないと思いました。高校の校歌は浜茄子の花、という歌詞の部分しか思い出しません。

☆小学校の校歌

結構覚えていたつもりでしたが、話し言葉と書き言葉のように、歌詞を理解して歌っていたのではなく“歌い言葉”(?)で覚えていたのだと思いました。やっぱり小学生にとって難しい言葉は理解できず、感覚で記憶していたのだと思います。

1番の歌詞で好きなフレーズは、出だしの「大空高くそびえ立つ」の部分です。運動会の応援合戦で、「校歌」は絶対歌っていました。応援合戦の出だしが肝心だったので、校歌の最初に気合いを入れていたのを覚えています。また、大空高くという表現が素直に心に入ってくるので、開放感を感じたりしていました。2番では、「流るる川のせせらぎは」です。山や川で遊ぶのが日課だったので、歌うときにいつも自分が遊ぶ姿を連想していました。地域柄かもしれませんが、“せせらぎ”という言葉を理解していたので、川の流れを想像しながら歌うのが好きだったのだと思います。

☆中学校の校歌

1番の歌詞は意外とよく覚えていましたが、やはり歌詞がごちゃごちゃになっている部分があるなと感じました。振り返ってみると、中学校の時が一番校歌を歌う機会が多かったです。同級生みんな学校が大好きで、地域に誇りを持っていたので、校庭などでも円になってみんなで校歌を歌ったりしました。歌詞を全部思い出せなくてショックだったのですが、私は常に伴奏をしていたので、歌詞があいまいな理由にはそれも

含まれているかもしれないと思いました。

1 番の歌詞で好きなフレーズは、「おおらかに清く明るく学ぼうよ」です。メロディが盛り上がるところで、“呼びかける言葉”が歌われているので、気持ちも盛り上がりながら気合いが入るような気がするからです。2 番の歌詞では、「けがれなき流れをくみて」です。流れを“くみて”という言い回しがかっこよく感じられ、また清々しい気分になるので好きでした。

☆高校の校歌

校歌を調べるために卒業アルバムを開くまで、3 番まであったことを忘れていました。改めて歌詞を見ると、歴史と風土に焦点を当てた校歌だったのだなと思いました。校歌のリズムや歌詞は嫌いではなかったのですが、覚えていないのはやはり学校に行くことが、私が高田市（隣町）に行く理由でしたし、部活に勤しんだためにあまり高田市について知らず、地域への愛着心が少なかったからだと思います。

1 番の歌詞で好きなフレーズは、「はまなすの花ほの赤し」です。はまなすの花が綺麗でかわいいので、印象に残っていたのだと思います。また、友達に『なすかわ』という苗字の子が居て、ふざけて歌ったりしていたので覚えていたのかもしれませんが。2 番では、「日ごとのつとめいそしまん」という歌詞が、こつこつ努力していこうと思わせてくれるので好きでした。3 番では、「進みなん」という歌詞が好きです。最後の締めくくりで、これからの道しるべという感じがして、背中を押してくれる歌詞だからです。

高校の校歌は、大船渡市の市民歌と混じって覚えてしまっていました。やはり、地元というのは長く住んでる分、自然と愛着が沸くのかもしれないと思いました。地元を離れて、見つめ直さないと気付かないことや、地域の良さというのを大切にしたいです。

「高田」：岩手県陸前高田リアス式海岸と、牡蠣などの海産物が有名だと思います。

「松原」：学校の近くに「高田松原」という海岸があります。松林を過ぎると海が見えるので、そう呼ばれているのかもしれないと思いました。ランニングコースや、歩道も整備されていますが、自分の好きなところを歩けるので、身近に松の木を感じられるところですね。私はこの砂浜でのトレーニングがきっかけだったので、あまり行きたいと思わなくなってしまうことが…。

「氷上」：これもたぶん地名だと思います。「氷上山」という山や、「氷上神社」がありました。

③感想と、レポートを通して考えたこと

校歌を思い出してみるとというのは、意外と面白かったです。思い出や故郷を振り返るとともに、自分を振り返る作業でもありました。覚えているところ、覚えていないところを比較すると、そのときの自分が何を考えていたのか思い出したり、好き嫌いが明確なので「記憶」は素直だなと感じました。

このまま時代が変化していくと、「地元」と呼ばれる心の拠り所も少なくなっていくのではないかと心配になりました。現代の社会が抱える様々な問題を考えると、「地域」という概念がないために起こってしまう問題もあるように感じます。集団よりも個人へと移行していますが、今の時代だからこそ「地域」というものが必要なのだと思います。

また、出身地域の環境や人々の文化、そしてそこでの個人の経験によって、「校歌」についての認識にすごく差が出ると思いました。地域性を調べることもつながると感じ、地域内での問題解決のための資料にもなるのかもしれないと思いました。

今度の同級会では、懐かしさを味わいながら「校歌」を歌いたいと思います。

（青森県女子）

自分の小学校・中学・高校時代の校歌を考えてみましたが、正直、中・高校の校歌はほとんど覚えていません。むしろ、はるか昔の幼稚園の園歌のほうがよく覚えていました。

幼稚園や小学校の校歌のほうがよく歌う機会があったからのようだ。そこで、卒業アルバムから校歌を見て自分がどの程度覚えているのか、またその校歌に表してある地域特性に着目してみました。

☆〈小学校〉青森県十和田市立南小学校

北に甲田の峰続き、三木のが原の春浅し。幼き瞳輝かせ、我ら文化を結ぶ者、学ばんここに、……
南の原のもゆるごと……

太平洋を登り来て……

☆中学校

八甲田山ゆるぎなく、奥入瀬川豊かに流る。風光る、
風光る、緑の広野。空たかく、空高く……

☆高 校

全く覚えていませんでした。

ちなみに、この校歌は有名な佐藤晴夫さんが作ってくださった校歌で、先生たちがとても自慢していました。

☆幼稚園の園歌、私立南幼稚園

耳を澄ましてご覧、明るい歌声聞こえてくるよ

良い子になれと（手を2回たたく）丹羽の鳩（手

を2回たたく)

ぼくとわたしで歌います。ラララン、ラララン、ラ
ランランラン。

仲良し子ども、南幼稚園

☆全体的に

地域の地名がどれくらいは入っているか、調べてみ
ると

「八 甲 田」小中高で

「三木が原」小中高で

「奥入瀬川」中高

「太 平 洋」小中で

「荒野」新渡戸稲造の祖父と父が十和田市を開拓し
水を引いてきたので、よく開拓の地という語が使われ
る。

私はなぜ高校や中学よりも幼稚園や小学校のときの
校歌のほうに覚えているのか考えてみたところ、幼稚
園・小学校の校歌のほうに歌う機会が多くあったから
だと思いました。校歌が地域性を取り入れて作られて
いることに着目すると、色々と面白いものが見えてく
るなど改めて感心しました。こんなところにも地域性
があったのかと。

お わ り に

ここでは、校歌研究の手始めとして、先行研究にな
らい筆者の郷里の伊豆地方の小学校の校歌の歌詞の内
容を見てみた。また、筆者の授業の受講者たちに、出
身学校で歌った校歌の感想を述べてもらった。レポート
の内容を見ると、全般的に校歌に懐かしみを抱き、
学校・郷土・同窓生に愛着を促進した校歌の持つ意味
を肯定的に評価するものが多かった。これをもとに、
これからの研究を進めていきたい。特に児童生徒が校
歌をどう受け止めているのか関心を持って調査してみ
たい。校歌の歌詞の内容は必ずしもその学校の関係者
が総意で作ったものではなく、特定の作詞者によって
書かれたものである。しかし、校歌の制定の過程でそ
この学校にふさわしいものでなければ受け入れられな
いだろうし、作詞者も皆の願いを付度し、その学校に
ふさわしい内容を盛り込もうとして作詞しただろうと
想像する。

文 献

牛島達郎 2001 「校歌に関する調査研究Ⅰ 福岡市
立小学校を中心に」
福岡女学院大学紀要. 人文学部編 11, 45-73.

牛島達郎 2004 「校歌に関する調査研究3 佐賀県の
高等学校を中心に」

福岡女学院大学紀要. 人文学部編 13, 29-49.

大庭茂美 1996 「校歌・校章・校訓の研究 (1)福岡県
内の高等学校を中心に」

九州教育学会研究紀要 24, 117-124.

大庭茂美 1996 「校歌・校章・校訓の研究 (3) 長崎
県内の小学校を中心として」

九州教育学会研究紀要 26, 109-118.

大庭茂美 2004 「校歌・校訓・校章の研究 (9) 福岡県
下の藩校・私塾起源の学校を中心として」

九州教育学会研究紀要 32, 53~60.

北原理雄 1988 「校歌に謳われた松阪の景観構造：
松阪の都市景観に関する研究 その1」

日本建築学会学術講演梗概集. F, 都市計画, 建築
経済・住宅問題, 建築歴史・意匠Vol. 1988, pp.
31-32.

北原理雄・大谷博三・木下誠一 1989 「校歌に謳わ
れた津の景観構造：津市の都市景観に関する研究
その2」日本建築学会学術講演梗概集. F, 都市計画,
建築経済・住宅問題, 建築歴史・意匠Vol. 1989,
pp. 55-56.

北原理雄 1992 「校歌に謳われた銚子の景観構造」

日本建築学会大会学術講演梗概集 (F分冊) pp.
371-372

小林一彦 2003 「ふるさとの山 ふるさとの川…校
歌はどこへ行くのか」

京都産業大学日本文化研究所紀要 8号 244 -
276.

椋田和美 2001 「日本の校歌に見る定型的風景」地
理科学 56 (3), 203

矢部恒彦・北原理雄・徳山郁芳 1995 「小学校校歌に
謳われた全国の地域景観イメージに関する研究」
日本建築学会計画系論文集 472, 111-122.

(平成20年11月27日受理)